

2020 年 8 月 30 日（日）「足に気をつけよ ～礼拝の心得〔その 1〕～」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 4:17-5:6

4:17 神殿に行くときには、足に気をつけなさい。聞き従おうと神殿に近づくほうが、愚かな者がいけにえを献げるよりもよい。彼らは知らずに悪事に染まるからだ。

5:1 神の前に言葉を注ぎ出そうと、焦って口を開いたり、心をせかしたりするな。神は天におられ、あなたは地上にいるからだ。言葉を控えよ。

2 仕事が増えれば夢を見、言葉が増せば愚かな者の声になる。

3 神に誓いを立てたら、果たすのを遅らせるな。愚かな者は喜ばれない。誓いを立てたことは果たせ。

4 誓いを立てて果たさないなら、誓いを立てないほうがよい。

5 口によって身に罪を負うことのないようにせよ。使いの者の前で「あれは過ちだった」と言ってはならない。神がその声に怒り、あなたの手の業を滅ぼして、なぜよいだろうか。

6 夢が多ければ、ますます空しくなり、言葉も多くなる。神を畏れよ。

《新改訳 2017》伝道者の書 5:1-7

1 神の宮へ行くときは、自分の足に気をつけよ。近くに行って聞くことは、愚かな者たちがいけにえを献げるのにまさる。彼らは自分たちが悪を行っていることを知らないからだ。

2 神の前では、軽々しく心焦ってことばを出すな。神は天におられ、あなたは地にいるからだ。だから、ことばを少なくせよ。

3 仕事が多ければ夢を見、ことばが多ければ愚かな者の声となる。

4 神に誓願を立てるときには、それを果たすのを遅らせてはならない。愚かな者は喜ばれない。誓ったことは果たせ。

5 誓って果たさないよりは、誓わないほうがよい。

6 あなたの口が、あなた自身を罪に陥らせないようにせよ。使者の前で「あれは過失だ」と言ってはならない。神が、あなたの言うことを聞いて怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてもよいだろうか。

7 夢が多く、ことばの多いところには空しさがある。ただ、神を恐れよ。

【序論】

現在、私たちはオンライン形式を交え、かつて経験したことのないスタイルでの礼拝を行なっています。人があまり集まらない礼拝が続くのは、私自身 40 年生きてくる中

で初めての事です。この形式にも少しずつ慣れてきた感がありますが、そこには賛否両論、実際上のメリットとデメリットがあるでしょう。「デメリット」という言葉自体がふさわしい表現であるか確信はありませんが、やはり聖徒同士の物理的距離は少なからず「心の距離」となり得ますし、礼拝堂に集まって声を合わせて賛美し、同じ空間の中で隣人の存在を意識しつつ礼拝をささげるのとはやや異なります。実際に顔を合わせれば、互いに安否を問い合うことができ、時には手を置いて祈って差し上げることもできるでしょう。一方、オンライン礼拝のメリットとしては、これまで諸事情で礼拝に集うことのできなかった方々にも、礼拝をお届けできるようになったことです。海外勤務の方、お子様が幼いためになかなか出て来られない方、体調を崩しておられる方、疎遠になっていた方……が動画を見てくださっているという情報を得ることができ、この新しい時代が秘めている可能性に感謝をささげてもいます。また、これまで礼拝は「教会内の」営みでありましたが、ネットを介して誰にでも見ていただけるようになり、教会の敷居が低くなりました。教会の中で何が行なわれているのか、興味がありながらも一歩を踏み出せなかった方々が、「ああ、礼拝とはこういうものなのか」と、ある程度雰囲気を知ることができる機会となったからです。

一番良いのは、再び皆様が礼拝に集える状況が戻ってくることですが、そうなったとしても礼拝の配信は継続する予定です。いずれにせよ、どんな形であれ日曜日の礼拝に参加する私たちにとって、その時間は特別に神のために取り分けられたものでなくてはなりません。今は感染拡大防止のための配慮として人的距離を保つことが求められていますが、その期間であっても神の許に足を運んで礼拝のために自らをささげるという感覚を失ってはいけないと思うのです。イスラエルの民が過越の祭の度ごとに離散の地からエルサレムまで巡礼した、その意識を私たちも忘れないようにしたい。彼らはそのために旅費を蓄え、仕事を休み、わざわざ犠牲の動物を携えて神殿を詣でたのです。

【本論】

今日から5章に入ってまいります、4章の中心テーマが「(特に人との) 交わり」であったという流れから、ここからはより高次の「交わり」が意識されます。今度は「神との交わり」であり、礼拝に臨むときの具体的な姿勢が教えられていく。本書の全体的な傾向は、詩文形式によって人生のあらゆる営みを揶揄するような内容ですが、ここはやや例外的にイスラエルの儀式律法が取り上げられます。今日は6節までをお読みしましたが、ここでの中心主題は「礼拝における姿勢」であり、その際に礼拝者がささげる三つの行為が呈示されています。

①いけにえ (4:17)

②祈り (5:1-2)

③誓い (5:3-6)

この箇所を三回かけて学ぶ予定であります。聖書協会共同訳は、ヘブル語原文に従って、4:17 から新しいトピックに入るようにしています。一方、新改訳 2017 は、内容が明らかに変わっていることから、4 章を 16 節で締めくくり、ここから新しい章に入るようにしています（読者にとってはこの方が読みやすい）。二つの訳の間に節のズレがあると扱いにくいのですが、ここでは聖書協会共同訳を朗読用テキストといたします。

本論 1. 足を見張れ

神殿に行くときには、足に気をつけなさい。(4:17a)

ここで「**神殿に**」と訳されている言葉 (אֶל־בֵּית הָאֱלֹהִים／エル・ベース・ハーエローヒム) は直訳すると「神の家に」ですが、イスラエルの宗教においては、神と民が出会う場所としての「神殿」または「幕屋」を意味するでしょう。捕囚後には「会堂」が礼拝の中心となっていきます。本書が書かれた時代をいつと想定するかによって、解釈は変わってきます。いずれにせよ、そこは神聖なる礼拝の場であって、人々は神と会見するためにそこへ足を運んだのです。信仰深いイスラエル人にとって、そこは祈りと瞑想の場所でした。

私たちにとりましては、長年この会堂が礼拝の場所であり続けてきましたが、今やパラダイム転換が起きつつあります。オンラインであればどこにいても礼拝にあずかることができる時代となったのです。初めにも申しましたように、この便利さが行き過ぎると、「神と出会うために足を運ぶ」という感覚が忘れられていくかもしれません。感染症への対応と神への献身の姿勢をどう両立させていくかが、現在多くの教会が直面している課題ではないでしょうか。

「**足に気をつけなさい**」という面白い表現が出てきます。このフレーズは、直訳すると「あなたの足を見張れ」となります。これは当時よく使われた慣用表現だと思われませんが、読者の生活態度を問い、神の御前で何を語り何を行なうべきかを吟味させるものです。神と出会うために向かう自分の足、それは週の六日間を通して整えられています。日曜日にいきなり本番を迎えて慌てふためくのではなく、常に「主の日」を意識して生きるということです。その過ごし方によって、礼拝にあずかる私たちの喜びの大きさは違ってきます。人の心の中は他人には分かりませんが、自分がどういう歩みをしてきたかは自身が一番よく知っています。罪を抱えたまま神の御前に入るか、悔い改め、

罪を清算し、あるいは誰かと和解した上で神の御前に出るかは、その人の礼拝の質を大きく左右するでしょう。

誰であれ講壇に立つ者は、とりわけこのことが問われます。私が長年心がけてきていることは、家族の間で気まずいことがあるままで礼拝の時間を迎えないようにということです。怒りや憎しみに満たされていては、御言葉を真に取り次ぐことはできません。

だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、きょうだいが自分に恨みを抱いていることをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って、きょうだいと仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。(マタイ 5:23-24)

これは主イエスの厳しい教えです。これを本当に実行できている人はどれほどいるでしょうか。この聖句が重荷となつてのしかかってきたこともあります。小さな問題はクリアできたとしても、大きな問題となるとなかなかそうはいかない。感情では許しきれないことがあるからです。しかし、それでもこの御言葉に生きようとするとき、まず意志をもって許しを宣言してみて、礼拝を通して神様が自分の抱えている問題に光を当ててくださることを願うようにしてみましょう。これもまた「足に気をつける」という事柄の一つの側面だと思います。私たちは律法に縛られるのではなく、福音によって解放されることができるのです。

本論 2. 聞き従う心で

聞き従おうと神殿に近づくほうが (4:17b)

ここでは「聞く」姿勢について教えられています。人間の基本的な傾向は、自分の語ることが人に聞いてもらいたい、自分を理解してもらいたいということでしょう。「聞く」能力は誰にでも生まれつき備わっているものではなく、むしろ開発され、磨かれなくてはなりません。このことは神との関係においても言えることであり、人は祈りの中で神に対して自分の思いばかりを告げている可能性があります。しかし、神が第一に求めるのは「聞く」ことであり、ご自身の最善の御心に人が黙して耳を傾けることなのです。

申命記 6 章には、「シェマー」と呼ばれる有名な聖句があります。「シェマー」とは「聞け」という意味のヘブライ語で、ユダヤ人は祈祷の中でこれを歌い上げます。

聞け、イスラエルよ。私たちの神、主は唯一の主である。心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい。今日私が命じるこれらの言葉を心に留めなさい。そして、あなたの子どもたちに繰り返し告げなさい。家に座しているときも、道を歩いているときも、寝ているときも、起きているときも唱えなさい。その言葉をしるしとして手に結び、記章として額に付け、また家の入り口の柱と町の門に書き記しなさい。(申命記 6:4-9)

「聞く」という言葉には「従う」という意味が含まれています。真に聞くとはい、相手が何を言いたいのかをよく考え、理解し、自分の中で消化し、それを自分の言葉で言い直し、それが本当にそうだと思うなら実行に移すということです。ただ耳から音声として入り、反対に抜けていく、あるいは撥ね退ける、自分の言葉を被せる、実行しないというのでは、聞いたことにはならないでしょう。聖書の言葉は自分を造り変えてくれるに違いない、その言葉には神の知恵があり、力があり、人を罪から贖い、苦しみから解放するものだということを信じて読み、自分の血となり肉となることを求めて向き合っていくとき、主の御業は必ず起きるでしょう。

それゆえ、信仰は聞くことから、聞くことはキリストの言葉によって起こるのです。

(ローマ 10:17)

本論 3. 不従順ないけにえの空しさ

愚かな者がいけにえを献げるよりもよい。(4:17c)

ここでは、ユダヤ人が礼拝においてささげたいけにえについて述べられています。礼拝者はいくつかの目的を果たすために動物のいけにえを規定に従ってささげました¹。その目的は主に三つあります。

- ①罪からの贖い
- ②神への感謝
- ③神との交わり

いけにえは神が指定された方法でささげられました。それは、そのいけにえが神の御心に適うためのものとなるためです。罪を犯した人間はそのままでは神との交わりに入っていくことができないので、血をもって贖われ、神との関係が和解した上で会見しなければなりません。神はそれほどに民との交わりを求めておられ、その関係が良好に保たれる道をお与えになったのです。

しかし、このいけにえはやがて心の伴わないものとなり、宗教的形式主義が蔓延^{はびこ}るようになりました。形の上では規定通りにいけにえがささげられているのですが、礼拝者の生活がそれに見合ったものではない。正義と公正は失われ、貧しい者やみなしごは虐げられ、神に対して誓ったことを果たさない人々がいる。この本質を失ったいけにえは、

¹ 動物のいけにえは通常、牛、やぎ、羊をもってささげられたが、貧しい人は鳩をささげることも認められていた。いけにえの規定については、^{しゅうおん}酬恩祭(レビ 3:1～)、^{けん}罪祭(レビ 4:1～)、^{はん}愆祭(レビ 5:14～)、^{はん}燔祭(レビ 6:8～)、^{よう}揺祭、^{きよ}挙祭(レビ 7:30～)、火祭(民数 28:1～)などの箇所を参照のこと。

むしろ神の怒りにふれるものとなったのです。

彼らは知らずに悪事に染まるからだ。(4:17d)

ここは翻訳の難しい部分で、文字通りに訳すと「彼らは悪を行なうことを知らないから」となります。ただ、文脈で捉えるならば、ここで言われていることは、いけにえをささげている人本人が、「神に喜ばれるだろう」と思ってささげているものが、実は「悪しきもの」となっていることに気づいていないということでしょう。それは、私たちの日常の生活とささげものとの間に一致があるかどうかという問題なのです。

何をもって主にまみえ、いと高き神にぬかずくべきか。焼き尽くすいけにえか、一歳の子牛か。果たして、主は幾千の雄羊、幾万のしたたる油を喜ばれるだろうか。私は自らの背きの罪のために長子を、自らの罪のために胎から生まれた子を献げるべきか。人よ、何が善であるのか。そして、主は何をあなたに求めておられるか。それは公正を行い、慈しみを愛し、へりくだって、あなたの神と共に歩むことである。(ミカ 6:6-8)

主イエスがおささげになった（ご自身という）神への完全ないけにえによって、今や私たちは動物のいけにえをささげる必要はありません。しかし、「形式ばかりのささげもの」に対する警告は、常に私たちの礼拝に向かう姿勢を問い質すものであり、私たちがどのような姿勢で神の御前に出ているかを吟味させます。

【結論】

物事の形式化は、常に心の緩みと背中合わせの危険性を持ちます。これは、実際の礼拝の場に集う者にとっても例外ではなく、賛美、祈り、献金といった「ささげもの」がいつしか意味を考えないものとなっているかもしれません。御言葉を取り次ぐ説教者においても、語っていることと日頃行なっていることが乖離^{かいり}していたとしたら、やはり同様のことが言えるでしょう。礼拝の形式も常にアップデートされる必要があります。どうしたらより神に喜ばれるものとなるだろうかと問い続け、考えることをやめず、私たちの心からの礼拝をささげることができればと願います。

いけにえも供え物も、あなたは喜ばれず、私の耳を開いてくださった。焼き尽くすいけにえも清めのいけにえもあなたは求められなかった。その時、私は言いました。「御覧ください。私は来ました。私のことが記された巻物の書を携えて」と。わが神よ、私は御旨を行うことを喜びとしてきました。あなたの律法は私の胸の内にあります。(詩篇 40:7-9)

【祈り】

人の心を知られる神よ。私たち人間は常に便利さを追い求めている生き物です。それによって文化が形成され、数多くの発明品が世に出てきました。その恩恵にあずかって生きている私たちであります。しかし、それと同時に、神の御前に出るときに、手間をかけて準備をするという姿勢を失わないようにしたいと思います。私たちの賛美も祈りもささげ物も、常に最上のものが御前に備えられますように。私たちのすべてをもって神を礼拝するという姿勢を生涯に亘って全うすることができるよう、お助けください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
民との交わりを求め、七日ごとに主の日を備え給う、父なる神の愛、
神と人との間に立ち、民を受け入れられる存在となし給う、主イエス・キリストの恵み、
礼拝に向かう者の足を整え、御前に聖き礼拝をささげさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。